札幌大学総合論叢　第一二号（二〇〇一年一〇月）

〈創作〉

劇『ピアノの休戦』

原子　修

（一）

※　良質のスピーカーと再生装置で、ナレーションと音楽を、すこし高めに流し、観客の魂を奪うこと。

※　一種のナレーションの劇なので、ナレーションは、良く練習の上、他の声や音楽と一緒に、前もって、早目に録音し、それをもとに稽古と本番を行うとよい。

〈出演者〉

グレーブ少年
チェチェンのゲリラ隊
ロシア兵の一隊
（声のみ）
ナレーターの声
三日月の声
ゲリラの隊長の声
グレーブの声

※　開幕前の、キャスト・スタッフ紹介の後、次のコメントをアナウンスする。

コメント

「この劇は、生田原町のちゃちゃワールドから出版された、『―子どもの権利条約童話―月と太陽と子どもたち』の中の作品をもとに、原作者である札幌大学教授の原子修先生が、脚色したものです。
子どもの権利条約は、一九八九年に国連総会で採択された、世界の子どもたちの「生きる権利」「育つ権

利」「参加する権利」「守られる権利」を大切にしようとする、全人類の約束事です。
今日上演する「ピアノの休戦」は、子どもの権利条約の第一三条「表現の自由」がテーマです。ピアニストとして、幻の演奏会を開いたグレーブ少年の、命がけの演奏が、戦場に、つかのまの平和をもたらすことができたのです。

では、開演いたします」

両側は鋭い枝で空を突き刺す雑木林
中央は広場
広場の中央奥に一台の古ぼけたアップライトのピアノと椅子
広場の上に大きく青白くかかる三日月
暗転　不気味な音楽低く鳴る
ナレーターの声
「三日月は、ほっそりとやさしい目をひらいて、グロズヌイのまちのほうを、みやりました。
ひまわりの花のように、あでやかに咲いていたあのまちは、いったい、どこにすがたを消してしまったのでしょう。
焼けくずれた建物……道ばたに投げすてられた戦車の残がい……
でも、三日月は、はげしい撃ち合いでへし折られた雑木林の枝をすかして、いくつかの黒い影が、腹ばいのまま、じりじりと、落葉を敷きつめた空地の方へと、移動するのを、みつけました。

（照明　上手から　腹ばいで進む　チェチェンのゲリラ隊の一行を照らす）
にぎりしめた自動小銃の銃身に、かすかな月の光が、さざ波のように、はねおどりました。
チェチェンの、ゲリラ兵の一隊です。
（風の音）
つめたい風が吹きおこって、はだかの梢を、さむざむと、ゆさぶりました。
（グレーブが　身をおこし　顔をあげて　三日月を　見る）」
三日月の声
「グレーブ！」
ナレーターの声
「驚きのあまり、三日月は、危うく、声をあげそうに、なったのです。
一五歳の誕生日の夜、部屋の窓をあけ、月のかすかな光をたよりに、チャイコフスキーのピアノコンチェルトを、オーケストラの伴奏を頭に思い描きながら、つかれたように弾いていた、ものやさしい少年！
音楽会で、まちのオーケストラとの共演をめざし、いっしょうけんめいに楽譜をそらんじ、練習に余念のなかった、ピアニスト志望のグレーブ！
それが、どうして、いまは、自動小銃のつめたい銃身をにぎりしめ、殺し合いの恐怖におののくゲリラ隊の一員として、戦場にいるのでしょう。
（別の不気味な音楽　低く鳴る）
（別の照明　下手から　身を低くして進むロシア兵の一隊を照らす）
そのとき、三日月は、確かに見たのです……空地の向うの、別の林から、もっと性能のいい自動小銃をにぎりしめて近づく、ロシア兵の一隊を！」

（四）

三日月の声（強くささやき）
「グレーブ、気をつけて！」
ナレーターの声
「三日月は、そっと、小声で、言いました。でも、その言葉は、かすかな銀色の光となって、グレーブの、泥だらけの髪の毛に、ふりかかっただけだったのです。やがて、やっと、林のはずれに辿り着いたグレーブは、あっと、声をあげました。（別の照明　ロシア兵の方から　広場の中央の奥に置かれたピアノを照らす）
ピアノです。落葉のしとねの上に、一台の、古ぼけたアップライトのピアノが、しっとりと、月の光にぬれて、立っていたのです。
だれが、置き去りにしていったのでしょう……ああ、オトナ達によって、力ずくで、ゲリラの一隊にひきずりこまれてからも、ずっと、片時もまぶたから離れることのなかった、ピアノ！　どんなにはげしい撃ち合いの最中（さなか）でも、けっして忘れることのできなかった、ピアノ！　それが、黒光りを放ちながら、かすかな威厳を漂わせて、いま、目の前にあるのです」
グレーブ（スポットライトの中で）
「（思わず　上半身を起こし　ピアノに手をのべ　叫ぶ）ピアノだ！」
ロシア兵の一隊　さっと身を伏せ　自動小銃の狙いを　グレーブにつける
ゲリラ隊　いっそう低く　地面に腹ばい　自動小銃の狙いを　ロシア兵の一隊につける
ゲリラの隊長
「（低く　鋭く）グレーブ！　危い！　伏せろ！」
ナレーターの声

（五）

「ゲリラの隊長が、必死に、命じました。しかし、グレーブの耳には、もう、あの、すばらしい作曲家の生みだした、月の光で織り上げたように美しい音楽が、ピアノの方からきこえてきていたのです」

グレーブ

「（絶叫して　立ち上がり）ピアノだ！」

三日月の声

「グレーブ、危ない！」

ナレーター

「三日月も、声にならない声で、必死に叫びましたが、それも、やっぱり、青水晶のさざ波となって、硝煙にすすけたグレーブの頬を、そっと、撫でさするだけだったのです」

ゲリラの隊長

「（低く　いっそう鋭く）グレーブ！　伏せろ！」

ナレーターの声

「自動小銃の引き金に指をかけた、ゲリラの隊長が、もう一度、しのび風のような声で、命じました。

でも、グレーブの目には、もう、ゲリラ兵の一隊も、ロシア兵の一隊も、けっして映りはしなかったのです。ただ、ピアノだけが……一台のぼろぼろのピアノだけが、見えていたのです。

そして、本当に、グレーブは、そのピアノが、自分を呼んでいる、と思ったのです」

グレーブ　銃を捨て　両手を前にのべ　ピアノに向かって　一足一足　ゆっくりと　夢遊病者のように　歩みはじめる

静寂　沈黙　やがて　かすかな潮騒の音

ナレーターの声

「もう、だれの声も耳に入らないグレーブには、ただ、彼のピアノコンチェルトの演奏をききにやってくる聴衆の、心のはずむようなざわめきが、コンサートホールの海からわきおこるさざ波のように、甘く、そして、どこかすこし不安な感じで、きこえてきていたのです」

三日月の声

「グレーブ！」

ナレーターの声

「三日月は、もう一度、林をぬけでようとする少年に、声をかけましたが、それは、かすかな銀のしずくとなって、しっかりとつむられたグレーブの、両の瞼をぬらすばかりだったのです。

空地の枯葉に、グレーブの足がふれ、カサッと、鳴りました。

すっかり姿を現した少年に向かって、自動小銃の引き金をひこうとしたロシア兵たちは、一瞬、たじろぎました。

目をつむり、両手を前にのべ、ピアノに向かって進んでいく、かぎざきだらけの服装の少年から、何か、不思議な音が響いてくるように思えて、ロシア兵の一人一人は、じっと、凍りついたように、グレーブを、みつめました。

カサッ、カサッ

枯葉が鳴り、死の緊張は、薄明の大気を、いまにも、引き裂きそうです。

三日月は、一瞬つぶった目を、また、青白く、見開きました。

一発の銃声が、すべてを終らせてしまうのを、三日月は、見るにしのびなかったのです。

でも、ロシア兵の一隊は、しーんと、水をうったように、沈黙したままでした。応射しようと、引き金にかけた、ゲリラ隊の指も、緊張のあまり、氷の鈴の音（ね）のように、ふるえました。

（七）

ついに、枯葉をふむ音がやみ、グレーブが、ピアノに、辿り着きました。
椅子を引き寄せ、目をつむったまま、頭を高くあげました。
幻のオーケストラへと、敬意を送り、幻の指揮者に、合図を送りました。
幻のタクトがひるがえり、幻のシンフォニーが、鳴りだしました。
（チャイコフスキーのピアノコンチェルト　低く　静かに　鳴りはじめる）
第一楽章のはじまりです。
グレーブの指が、砲煙にけぶった鍵盤にふれ、ピアノが、うたいだしました。
調律もされていない、野ざらしのピアノ……戦火をくぐって、かろうじて生きのびたピアノが、とうとう、すすり泣くような、むせび泣くような声で、うたいだしました。
（コンチェルトのピアノ　高く鳴り　しばらく続く）
（コンチェルトの音　次第に低くなる）
しかし、三日月には、わかったのです……古ぼけて、ろくに音のでない、うちすてられたピアノが、グレーブの指といっしょに……いや、グレーブのこころとひとつになって、偉大な作曲家の、魂の美しい声を、奏ではじめたのを。
（コンチェルト　高まり　しばらく続き　やがて　また　徐々に低くなる）
そして、ピアノの演奏につれて、自然に、自動小銃の引き金から指をはなしはじめたロシア兵のひとりひとりにも、確かに、きこえてきたのです……ふるさとの森のざわめき……川のせせらぎ……教会の鐘の音や、わが家の朝食の皿の音が……
（コンチェルト　また　高まり　しばらく続き　やがて　ふたたび　徐々に　低くなる）
そして、第二楽章にすすむころには、チェチェンのゲリラ隊のひとりひとりも、すっかり、自動小銃の引

（八）

き金から指をはなし、ピアノの調べにのって、平和な街の街路樹の蔭をぬい、恋人とほほえみをかわし、年老いたお母さんのしわだらけの手のぬくもりに触れていったのです。

（若いロシア兵　銃を捨てて　立ち上がろうとする　隊長がそれを必死におしとどめる）

そして、とうとう、三日月は、木の枝をすかして、見てしまったのです……銃を捨てて立ち上がろうとした若いロシア兵の目にも、そして、彼を必死におしとどめた隊長の目にも、涙が、ダイヤモンドのしずくのように、美しくきらめくのを。

いいえ。

林の草むらにうち伏したロシア兵たちの目にも、反対側の林の草むらにうち伏したチェチェンのゲリラ兵たちの目にも、同じ涙が、同じダイヤモンドのしずくのように、美しくきらめくのを、三日月は、見ました。

ああ、いくさの場で、互いに殺し合わなければならない者同士の、悲しみ！

三日月も、つい涙ぐみ、ひとりひとりの男たちの涙を、銀色の美しい光にかえてやったのです。

（コンチェルト　また　高まり　最高潮に達し　やがて　徐々に　低くなり　ついに　鳴りやむ）

演奏がやみ、ピアノは、うたい終えました。

どんな深い海より、もっと深い沈黙の底で、なおも目をつむったままのグレーブが、顔だけを、三日月に、向けました。

（さざ波のような拍手が　強く　静かに　ロシア兵の一隊からおこり　すぐ　それに答えて　チェチェンのゲリラ隊も　そよ風のような拍手を　送る）

（両側の林からの拍手　次第に高まり　エメラルド色の海のうねりのように続き　やがて　ゆっくりと鳴りやむ）

（九）

ついに、グレーブ少年の、生まれてはじめての、ピアノコンチェルトのコンサートは、成功したのです。
ああ、戦場と化した落葉の空地での、幻のオーケストラとの共演！
（両側の林から　ロシア兵の一隊と　チェチェンのゲリラ隊　腹ばいのまま　後ずさりして　静かに　姿を消していく）
エメラルドの海のうねりのように続いた、両側の林からの拍手も、ゆっくりと鳴りやみ、いまは、もう、ピアノの一部になってしまったかのように、じっと動かないグレーブ少年と、彼をいつくしみ深いまなざしで見守る三日月を、そっと残したまま、ロシア兵の一隊と、チェチェンのゲリラ隊は、静かに後ずさりして、それぞれの林の奥へと、姿を消していったのです」
グレーブを照らしていた照明だけが残り
やがて　それも消え
照明　三日月を照らす
やがて
暗転

幕